二人の留学僧の得度式

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職　佐藤俊明

出　発　―三月二十九日―

昨日は終日雨で肌寒い一日だったので、朝、目を醒ましてまず気になったのは気温と天候だった。

暑い国の一番暑い季節にでかけるので真夏の出で立ちにしなくてはならぬのだが、そこに到着するまではこちらの気温に絶える服装でなくてはならぬのが厄介なこと。寒暖計を見たら十度だった。昨日の電話ではバンコクはいま三十六度だというから二十六度の温度差がある。毛糸のセーターを着込んで出かけなくてはならんかなァ、荷物になって嫌だなァ、と思いつつ夜の明けるのを待った。さいわい快晴である。これなら温度もあがると判断して割に軽装で出発した。正解だった。

十一時成田を離陸。機内は少々寒い感じだったが、ドンムアン空港に着陸して一歩機外に出ると、サウナに入ったみたいな熱気に包まれた。時計を見たら十七時三十分だった。明日からの

日中の暑さが思いやられる。

善光寺海外留学僧派遣育英会では、過去七年間に、九ケ国に三十五名の留学僧を派遣しており、そのうちタイ国にはこれまで七名を派遣したが、今年度派遣した二名の得度式が明後三十一日におこなわれる。落合隆、品田裕淳の両君だが、落合君はタイの仏教に魅せられ、善光寺黒田方丈の弟子となっての渡タイでもあり、また三年前ワット・パクナム住職の一行が来日された際、ご住職の要望により黒田方丈の四人の子息が沙弥の得度式を善光寺で挙げたが、タイ国上座部仏教の得度式が日本でおこなわれたのは有史以来はじめての盛儀とて各方面から絶賛を浴びたのだが、さいわい学年末休暇中なので、お礼の意を込めてワット・パクナムを訪れるとともに子供たちも親しんでいる落合君の得度式を見学させようと、黒田方丈は四人の子息に二人の姉妹を加え、倫子夫人を引率の先生として一家八人の「遠足」をおこなうことにした。それに私と写真家の駒澤氏が加わった。もっとも駒澤氏は、文芸春秋社が創刊する雑誌『マルコポーロ』の写真撮影のため、われら一行より一週間前、前記落合・品田の両君と共にバンコクに渡っていた。

さて、落合君がいかにタイの仏教に惹かれたか。それを知ることは得度式に臨む彼の心情を窺ううえに参考になることなので、彼の応募論文「タイ仏教に学ぶ」の冒頭を引用してみよう。

一つの印象的な映像がある。タイ国で長い間上映されたその映画は、ある青年の悲恋物語で、それは彼の死によって完結する。その死は何を象徴しているのだろうか。

バンコックの富豪の息子に恋人を連れ去られた農村の青年は、その事件を契機として日

ごろ父親から勧められている得度を決意する。父親はその決意を喜び、三衣（チーオン）を大切そうに持ちながら村人たちに報告してまわる。車座になって作業をする農婦の一人はその姿を見て小さく合掌をする。仏像でも比丘でもない。息子の得度を喜ぶ一介の農夫に向って合掌するその姿からは、南方上座部仏教を小乗仏教と賤称する根拠を見いだすことはできない。

釈尊の大きな手で蒔かれた教えの種子は、伝播された国々の風土や固有の文化に育まれて、様々な花を咲かせた。花の形や色の諸相の成立は、それぞれの国土に育つように自在に変化させる仏教の柔軟さによるものであるが、種子はあくまでも同一のものに収斂される。それは息子の得度を喜ぶ父親への農婦の合掌が、いくつかの媒体を通してもなお、光の速度で釈尊に向かって行くことと同じ構造を示している。映画という庶民文化の一断面、それも時間的には数秒の場面にも釈尊の姿はたち顕われる。

仏教学を修めたわけでもなく、寺院の出身でもない、ごく普通の教育を受け、現代の日本社会で働き生活する私にとって仏教はおおむね無縁なものであった。加えて、私にとって寺院とは特別な儀式や法事以外には関わることのない特別な場所であり、仏像は礼拝の対象ではなく、ほどほどの美意識を満足させる美術品であった。又、仏教のもつ様々な哲理は物事の認識の方法を拡大させることもあり得るといった程度の理解はあっても、日常生活における私の所作には仏教の影響はほとんどなかったと思われる。そのような私にとって仏教との出会いはタイ仏教との出会いから始まったといえる。（後略）

空港には小谷亀太郎先生が出迎えてくれた。小谷先生は在タイ五十周年という在留邦人の長老で、世界仏教徒連盟本部の事務次長、そしてまた日本人会事業部長として納骨堂奉賛会の初代会長、それが改名して仏教奉賛会の会長となり、現在は懇話会の会長を務めておられる。一般邦人のみならず、タイ留学の仏教僧はその殆んどが小谷先生のお世話になっている。それで昨年、小谷先生が来日されたのを機に、タイ留学僧の組織する「日本パクナム会」では、小谷先生の叙勲と在タイ五十周年を祝し、特に世界仏教徒連盟本部の事務次長として世界仏教徒の親善友好に尽くした功績を賛え、そして留学僧の受け入れと後見人としての尽力に感謝する祝賀会を東京・銀座の三笠会館で開催し、石附周行会長より感謝状と記念品を贈っている。

黒田方丈と私は、細部の打合わせがあるので小谷先生のクルマに乗り、倫子夫人と六人の子供さん方は、旅行社のチャーターしたバスでホテルに向かうことになった。ところがそのバスたるや五十人乗りの大型バスである。でっかいことの好きな黒田方丈の好みに合わせたわけではない。日本では三十年も前に姿を消したダイハツ・ミゼットがタクシーとして走っているこの国のことだから、手ごろなマイクロバスは配車困難だったのだろうが、とにかく大乗仏教徒を迎えるにふさわしく大きな乗物を提供してくれたものと感謝して受取って置こう。

二人の留学僧と駒澤氏にはホテルで出会った。なんでも空港まで出迎えてくれたのだそうだが交通渋滞で遅れ、おまけにマイクロバスを探しまわったという。これでは遅れなくても見つかるはずはなかった。

さて、落合君は当然ながら在家人の姿だったが、品田君は白い着物の上に黄色の法衣をまとっている。一見して私は〝おやっ！〟と思い、

〝得度式は明後日なはずなのに〟とわが目を疑った。そこで駒澤氏に訊ねてみた。

駒澤氏は「あれは真言宗のころもなんですよ（注・品田君は真言宗の僧侶）。それが面白いんですよ」と前置きしてこんな話をしてくれた。

「この間、エメラルド寺院を拝観したんですが、チケット売り場の係員は、入場者の上半身しか見えないので、上座部仏教の坊さんと思ったんでしょう。ただで通してくれたんです。ところが入口では全身が見えますからばれてしまってダメ。しかし別の寺ではフリーパスでしたよ」と。とにかくまぎらわしい色の黄衣をまとった品田君は時折善男善女から合掌されて、もうすでに上座部仏教の坊さんになりかかっていた。

「いやー、パクナムの食べ物は豊富ですよ」と、九十五キロの巨漢はいかにもうれしそうで、〝これなら大丈夫〟とたのもしく感じた。

この日の夕食は小谷先生が中華料理をふるまってくれた。これは二十五年に及ぶ親交の黒田方丈の歓迎と、さらには落合・品田両君への在家人最後の夕食を振る舞うために設けられたものであった。彼等二人はワット・パクナムに寝泊りしているので、正午を過ぎれば食事を採らない生活にすでに入っており、随分遠慮していたが、その間の事情は知り尽くしている小谷先生の勧めに有難くその好意を受けていた。

ワット・パクナムに拝登　―三月三十日―

冬から真夏に一夜にして変わった朝、ホテルの食堂に入ってゆくと、ボーイが「サムライ！」と声をかける。何事かと思えば、一週間前からこのホテルに泊っている、ひげをたくわえた作務衣姿の駒澤氏はそう呼ばれているのだった。

また、タイではいま「一休さん」が放映され

ているそうで、私たちの僧形を見て「一休さん、サワディー！」と声をかけてくれる。

こうした雰囲気に包まれて朝食を採っていると、昨晩到着したばかりとは思えない親しみが感じられてくる。

さて今日の日程のメインはワット・パクナムを訪れることである。昨晩小谷先生から連絡をとってもらったところ、午後五時に待ってるとのことだった。これは、日中の酷暑を避けての配慮でもあろうし、また、日中は市内観光をするだろうからとの推測によるものでもあろうか、まことに有難い時刻指定である。そこでバンコクおきまりのコースを辿って、まず水上マーケットをみて、暁の寺院・エメラルド寺院を拝観し、王宮を見物して昼食を採り、午後はローズ・ガーデンに赴き、ここで一時間近く小休止をとる。

ローズ・ガーデンを三時半に離れ、五時丁度ワット・パクナムに着いた。住職のプラ・タム・パンヤ・ボディと小谷先生は待機しておられ、快く歓待してくれた。

黒田方丈がまず一家を挙げてお礼に参上した旨を述べると、ご住職は一人一人からの礼を受け、相好をくずして、「よく来た、よく来た」とねぎらってくれた。

ついで黒田方丈は、

一、今年二人お世話になっているが、さらに一名、大本山総持寺の安居者、それにロスアンゼルス禅センターからアメリカ人一名を留学させてほしいし、招聘状をいただきたい。

二、留学僧を派遣して七年になり、三十五名を九ケ国に派遣しているが応募に当っての提出論文を一冊にまとめ、近々発刊する予定なので、顧問として序文をいただきたい。

と要請し、快諾を得た。そして明日の得度式挙行について礼を述べ、細部の打ち合わせをお

こなった。

次に病気静養中の副住職プラ・パワナ・コーソン・テイラ（父君は日本人、母君はタイ人で日本名河北国雄、タイの高僧のなかで、ただ一人日本語に堪能な人で、日本人留学僧から「アーチャン」「アーチャン」「先生の意」といって親しまれている方である）をお見舞いした。この方は三年前善光寺での得度式の際、教授師をお勤めくださったので、四人の沙弥が一段と成長し、逞しくなっている姿を見て心から喜んでくれた。

明日の得度式に出ていただけないのが何よりも残念なことである。一日も早い本復をねがってやまない。

アーチャンの室を辞して、次に図書館に足を運び、「日本文庫」の陳列状況を見せてもらった。

戦後、タイ国で得度し修行した日本人僧の数は約九十名に達している。またバンコク在住の日本人の数は間もなく三万人に達するだろうとのことであり、日本とタイ国との仏教交流は年々深まっている。

こうしたことから「日本パクナム会」は昨年三月の臨時総会で、ワット・パクナムに「日本文庫」を開設することを決め、その図書を留学僧や在留邦人に利用してもらい、日本とタイ国の相互理解と仏教文化の交流に役立てようとし、開設に必要な経費を会員から集めるとともに、広く仏教書籍出版社などに図書の寄贈を呼びかけ、合計五百冊をまとめた。

贈呈式は当初、六月にワット・パクナムで総会を開き、その際おこなう予定だったが、ワット・パクナム住職、副住職が共々にアメリカ巡錫の旅に出て半月も不在になるため、日本に立ち寄った機会を利用しておこなうことに急きょ改め、五月二十九日、東京・渋谷の東急インで

目録を贈呈した。

その贈呈式の様子を報じた「中外日報」（平成二年六月八日付）に、中村元先生は次のように称賛の一文を寄せられている。

本屋には米国本のみ
日本文化への道開けよう

このたび黒田武志老師の発願により、日本パクナム会がワットパクナムに「日本文庫」を寄贈されることは大変意義深い。東南アジアは日本と関係も深く、大事な地域だが、日本のことはほとんど知られていなかった。物資の輸出入は盛んだが文化面では無視されてきたと言っても過言ではない。あちらの人が日本について知識を得るには、ロンドンまたはニューヨークを介しているのが現状で、英語で書かれた日本関係書物を読んでいる。大変な遠回りをして日本のことを知っている。

第一日本センターというものがほとんど無い。形式的には外交機関に付属して作られているが、余りに貧弱だから、大使館の人が見せようとしない。見せて欲しいとお願いしても、お恥ずかしくて見せられないという状態だ。

タイはアジアで一番国情も安定し進んでいる。文化的にはアメリカの感化が大きい。バンコクの本屋に行って驚いたのは、並んでいるのはアメリカのものばかりという印象だった。日本についての本なんてありはしない。大国のインドでも日本の書物を少し置いているのはタゴール大学の支那学研究所だけだ。これも中国人の作った研究所の横に置かれている。これでは残念だと思い、若干の有志が発起人になって、民間の力で何百冊かタゴール大学に贈ったことがある。東南アジアでは唯一ではないかと思う。

タイ国に何もないことはまことに残念なことで、それが黒田老師の発願に応じて、このように多くの方々が御協力になったことを知って喜んでいる。

タイ国の人々は日本の特に仏教の要素に対して、互いに友人、同信の気持ちを抱くだろう。華僑の人は日本語の読める人がいる。寄贈図書の中には英語のものも相当あるので、これは直接理解出来ると思う。この頃は日本人の滞在者が増えた。現地の文化に新しく接する機会を与えることにもなる。

寄せられた図書は船便で送ったのだが、前記のごとくアーチャンが病気で仆れたため、その後の状況を知ることができなかった。そこで今回ぜひにもと思って見せてもらった次第である。本は無事到着し本棚に並べられていたが、翠雲堂に寄贈制作してもらった「日本パクナム文庫」と大書した看板は、まだ到着していなかった。

一言付記すると、本の寄贈そのものはさほどむずかしいものではないが、送料がかさみ、届けるのが至難である。五キロまで二四〇〇円、それ以上になると、本の定価の一割が関税として徴収されるので、ツアー旅行の際携行してもらえればともかくも、送料高が最大のネックである。

落合・品田の両君もこの「日本文庫」をはじめて見せてもらい、「これだけ本があればうんと勉強できる」と張り切っていた。

得度式に参列　―三月三十一日―

今日はこのたびの旅行のハイライト、得度式に臨む日である。得度式は午後五時からおこなわれるが、その前に剃髪式がある。さいわい午前中は別に予定がないので大理石寺院・ワッ

ト・ベンチャマボピットを拝観に出かけた。この寺は約百年前ラマ五世によって建立されたバンコクで一番新しい寺で、イタリーから運んだ大理石で造られたまことに美しい寺であるが、ローソクの火の不始末から火災に遭ったとかで、目下修理中。せっかくの美観も写真のバックにならず、仏さまを拝んで早々に引き上げたので、一時間ばかり時間にゆとりができた。そこで子供さん方の希望によりホテルのプールで水泳、水球を楽しむことにした。おかげで私も何年かぶりで泳ぐことができ、さわやかな気分になった。また得度式に臨むに当っての沐浴でもあるので、「沐浴身体　当願衆生　心身無垢内外光潔」（身体を沐浴すれば、当に願うべし、衆生、心身無垢にして内外光潔ならん）と口誦し、強引に水泳を得度式に関連付けた。

昼食を済ませて、四人の子息は全員改良衣に着替え、各自法衣と袈裟を携えてホテルのロビーに集合した。今の今までシャツに半ズボンという軽装の男の子四人が白衣に黒の改良衣、白足袋に草履という出で立ちであらわれたので周囲の人々は一様におどろきの眼差をもって見つめていた。

約一時間バスに乗り、ワット・パクナムに着いた。早速アーチャンの居室を訪れ、ここで法衣に着替え、お袈裟をつけ、まず、ワット・パクナムを今日の隆盛に導いた、「ロンポー」（われらが父）と敬まわれ親しまれている前住職プラ・モンコン・テムニの尊像を礼拝し『般若心経』を読誦した。

剃髪は、日本の得度式の場合と違ってきわめて簡単なものだった。

日本の場合は、得度者は爾前に白衣を着け、導師は盛装して位につき、香を焚き、微音にて三宝を勧請し、十仏名を唱え、「礼讃文」を読み、

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり。愛根わずかに断ずれば本身即ち露る」と諭し、出家の徳を賛え、次に「何某よ、世の無常なることを悟り、俗を棄てて仏弟子となる、まさに不思議の縁を思うべし」と唱え、ついで得度者の頭上に洒水灌頂、再び剃刀を拈じ「人生を流転すれば、恩愛を断つこと難し、恩愛を捨てて悟りに入る、これ真実の報恩なり」と唱え、導師、三たび剃刀を得度者の頭上に拈じ、「汝の頭上に、なおひと結びのシュラあり、ただ仏一人よくこれを断つ、われ今代って除去す、汝、許すや否や」と声をはげまし、許す、と答えを得てはじめて剃髪するのである。が、ここの場合は、建物のわきの大樹の下に椅子を置き、上半身裸の得度者の頭を濡らし、ハサミで切り、カミソリで剃る。頭だけでなく眉毛も剃り落とす。ただそれだけで、わずか数分間で終る。

「随分簡単なものだなァ」というと、駒澤氏いわく。「この間中国系の人の一時僧(タイでは男子二十歳にして五体健全ならば誰でも僧になれるし、とにかく結婚する前に僧になるのが一般的で、その期間は一週間、十五日間、一カ月、二カ月などと個々人の希望に応じて一般的に決められる)の剃髪式がありましたが、家族や友人三十人ぐらい参列し、それぞれハサミを入れたりカミソリを当てたり、写真を撮ったり、なかなか賑々しいものでした」とのこと。

日本の場合は、出家するということは本人のみならず家族にとっても一大決心を要することである。それだけに剃髪そのものに大きな意義を付与し、厳粛なセレモニーとしておこなうのであるが、この国の場合は一時僧の剃髪もあり、また一時僧でないにしても還俗に対する考え方はいたってゆるやかなもので、俗生活に還りたければ還俗し、また仏門に入りたければ入る。還俗は三度まで許されるという。仏門に入った

以上は戒律を守らなければならぬ。そこで戒律を守る誓約の儀式としての得度式は盛大におこなうが、その前の剃髪は当然の爾前処理として儀式化していないというところであろうか。

剃髪ひとつ見ても日本とタイとではこのように違うので、ここで日本の仏教とタイの違いについて触れておくのも無意味なことではあるまい。

お釈迦さまがご入滅になり、直接教えを受けた弟子たちも亡くなり、第二世代、第三世代と時代が経過するにつれ、お釈迦様の教えの解釈をめぐって対立が起こり、ついにいろいろな派に分れた部派仏教の時代となり、それぞれ自派の依り処とする経典の訓古的研究に没頭し、お釈迦さまの教えの枝葉末節に拘わるものが多くなった。ここにおいて、経典の奥にひそむお釈迦さまの教えの真実義を汲み取って仏教本来の姿に立還り、新しい時代に即応することが大事だとする仏教革新運動が抬頭して来た。

保守的な部派仏教においては、出家僧、つまりプロの坊さんが自らの悟りを得ることを最高の目的とするのであるが、新しい仏教運動では、仏教を信奉するのに出家在家の別はない。すべては仏の子であり、誰しもが悟りを求める菩薩である。そこで、自分だけでなく自他共々に悟りの岸に到るべく、衆生済度の誓願を立てて種々の波羅蜜行の完成を期すべきであるとするのである。

この仏教革新運動は燎原の火のごとく全インドにひろまり、その間、従来の伝承経典を超えて、仏の正法を開顕する新しい大乗経典が次々と創り出されたのである。そして大乗仏教は中国を経て日本に伝わり、小乗仏教はインド・スリランカ・タイの南方諸国に伝わった。ただ、大乗に対する小乗というといかにも見下げた感

じがするので、小乗といわず「上座部仏教」と称することに改められた。

さて、南方上座部仏教の比丘（僧侶）は二二七の戒律を守っているが、これだけの戒律を守るとなると衣食住に何等思いわずらうことのない、社会生活とは明確に一線を画した出家教団の比丘でなくてはできない。これは自他共々に悟りの道に進もうとする大乗仏教ではあまりにも煩瑣で窮屈すぎることである。そこで大乗仏教では十六カ条にすべての戒律を集約するのである。

前述のようにタイでは男子二十歳に達し、身体健全であれば誰でも僧になることができる。僧になるには「ウパサンパダ」（得度式）の儀礼を通らなければならない。

ウパサンパダとは「受け入れる」という意味のパーリー語で、サンガ（僧団）の一員として受け入れることを示すものである。

タイにおいて僧になることは、いわば一人前のおとなになることである。それは親を喜ばせることであり、また結婚相手に満足と安心を与えることである。しかし得度式を挙げるには相当の経費を要する。出家生活に不可欠の三衣つまり、アンタラワーサコー（腰巻）、ウッタラーサンコー（黄衣）、それにサンカーティ（黄衣をおりたたんだもの）やバアーツ（鉄鉢）及び日用品、それに戒師や参列僧に対するお礼の品々等々を準備しなくてはならぬが、これらの総額は月給の三倍ぐらいに相当するであろう。しかし幸いなことにタイでは「タン・ブン」といって、徳を積むことが最高の善行であり、同時にそれは自分を物質的にも豊かにするものであると考えられている。そして寺や僧団や僧に対する物質的な寄進こそ最善最良のタン・ブンとされている。したがって得度式があるともなれば、

自ら寄進を申出る人が少なくない。

さて、今回二人の得度式に際しては、二人とも善光寺留学僧であり、中でも一人は弟子でもあり、加えて今年は開山楳庵白純大和尚の十三回忌に正当しているので、黒田方丈は自ら二人のダーヤカ（施主）となるつもりだったが、アーチャンが、病気でもあるので「ぜひダーヤカにして欲しい」とのこと。そこで折半して一人づつ施主をつとめることになり、私がアーチャンの代理として参列することになった。

開式三十分前、クティ（僧房）のロビーにはたくさんのお供物がならべられ、ひとつひとつ、それを捧持するメチー（白衣をまとい、八戒を守り奉仕活動をする女性信者、最近は高校生・大学性が休暇を利用してメチーになるものが増えているという）が三十人位、それに小谷先生はじめ有縁の人びと、黒田ファミリーを加えて四十数名が、蓮華を持つ二人の得度者の前に二列に並び、ウポーサタ（布薩堂＝本堂）の囲りを三回右まわりして仏徳を賛えた。

十年前、日本人納骨堂のある寺、ワット・リアプで真言宗の青年僧野見山君の得度式に列したときは、銅羅や太鼓などの鳴物入りで踊りながらの三匝だった。得度式は俗人を仏のみ子に差上げるお祝いの儀式なのだから当然といえば当然かも知れないが、粛々として進むほうが私たち日本人にはふさわしいような気がした。

白衣に身を包んだ得度者は本堂入口にあるシーマ（結界標石、これのある寺だけが得度式ができる）の前で献香・献華・点燭して跪坐（ひざまづいて坐る）三拝、起立して「導師らに向いて礼拝し奉る。導師らよ、わが一切の罪過を許したまえ。わが徳は御身によって嘉賞されんことを。御身の尊徳はわれに与えられんことを。何卒、何卒」と唱える。この唱えごとは終始パーリー語で、暗記するには一、二週間はかかる

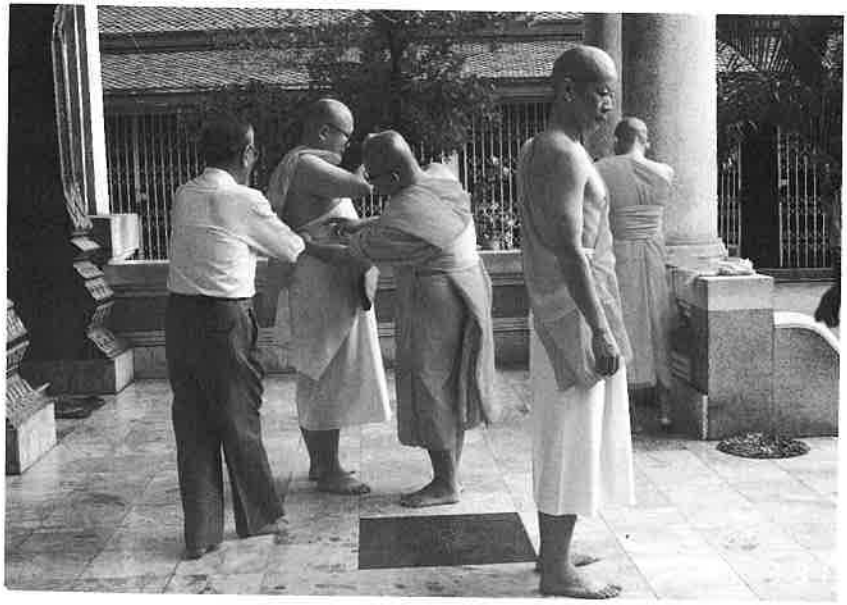
'91 3 31

という。一拝一唱、三度繰り返して本堂に入り、また同じような作法が続く。

一方本堂内では、僧衆二十数名ほどがコの字型に着坐し、定刻に入堂した戒師(住職)が点燭し、一同釈迦牟尼仏に三拝。戒師向きをかえて、コの字型の中心に、ご本尊を背にして坐わる。

得度者は出家を乞い、合掌した腕に黄衣をいただき、長跪(古い礼法の一つ。両ひざを地につけて、上半身を直立させてする礼法)して戒師の前に進み、黄衣を戒師に献げ、次に施主から戒師への供物を受けとって戒師に献上する。そして三拝して戒師より黄衣をいただき、合掌、起立して、前記唱え言を唱え、三たび重ねて出家を乞い奉る。

こうした所作が繰返し続き、やがて三衣をいただき、退堂して本堂裏で白衣を脱ぎ三衣を法の如く被着する。そして入堂して今度は戒師の前に進み、供物を献上して三拝し、前記唱えご



とを唱え、ついで三帰と戒を授けてほしいと懇願する。こうして三帰と戒が授与され、得度者が伝誦すること長々と続き、法名が授かる。落合君はピンダー・アラター、品田君はコーロー・アラタノー。アラタノーは住職の名前とのこと。

そして鉄鉢を首にかけてもらい、僧としての必需品三衣一鉢の確認をおこなう。そして戒師と教授師は得度者に教誡事項と同じく十三項目の障碍法の有無について質疑応答をおこない、最後に参列僧は沈黙によって賛意を表し、具足戒授与が全員一致で決定承認され、得度式は終るのである。

ついで、新比丘（僧）に対して垂示があり、終って「仰せの通り」と答辞を述べて三拝。施主は供物を献上して三拝する。式の流れは日本の得度式と大体同じで、所要時間も一時間だった。

式終了後、落合君が緊張そのものの顔であったのに対し、あの朗かで屈託のない品田君が、滂沱たる涙をじっとこらえている姿が印象的だった。

得度式終了して私は次のように謝辞を述べ、小谷先生に通訳してもらった。

「只今は善光寺留学僧二人の得度式を挙げていただき本当に有難うございました。そしてその儀式に参列させていただきましたことは寔に光栄かつ法悦の極みであります。

本来ならば黒田理事長が御礼申上ぐべきではありますが、実は黒田理事長、さきほど来、法悦に感無量の様子でございますので、常務理事の私が代って御礼申上げさせていただきます。

黒田理事長は今から二十五年前、ここワット・パクナムにおいて、只今のように得度式を挙げていただき、一年有余の修行生活を送ったのでありますが、その間に得た尊い体験をあとに続く修行者の為にぜひとも味わってもらいた

いとの念願に燃え、何とかこれが実現の方途を探って参ったのでありますが、〝念ずれば花開く〟といわれますように、七年前に花が開き、善光寺海外留学僧派遣育英会を設置する運びとなったのであります。

爾来、毎年、海外に留学僧を送っておりますが、これまで七年間に、九カ国に三十五名の留学僧を派遣しておりますが、ここワット・パクナムでは、今日の二人を加えて七名がお世話をいただいております。実は間もなくもう一人がご縁の深い大本山総持寺から、また、黒田理事長のお兄さん前角老師のもとからアメリカ人一名、計二名がお世話になる予定になっており、昨日ご住職よりご快諾いただいたところであります。

さらには三年前、ご住職のご一行がご来日なされた際、黒田理事長の四人のご子息のために得度式を挙げていただきました。これは日本はじまって以来の快挙として各方面から絶賛を浴びたのでありますが、本日、そのお礼言上の意もあって、そしてまた本場の坊さんの得度式をぜひ見せていただきたいこととて、その四人が、姉・妹とともにお母さん引率のもとに日本僧如法の姿で参っております。

このように、ワット・パクナムは遠い国の遠い異質の寺ではなく、まさに〝わが家〟といった親しみの感ぜられる寺であります。実はお互いがこうした親しみを抱いて触れ合うことが大事なことで、大袈裟にいえば、今、人類に求められているものはこのような親善友好の輪をひろげることでありましょう。

世界は今や一つの方向に着々とその歩みを進めておりますが、湾岸戦争に見られたようにナショナリズムと神を持つ宗教の融和には道なお遠しの感がいたします。しかし、さいわいにも仏教は神を持たず、四海平等を説くものであり、

これこそ来るべき新しい世紀の宗教であります。それにはまず私どもが仏教の内部においての親善友好の実を挙げなくてはなりません。そうした点において、只今の得度式は真に意義深いものであります。本当に有難うございました。

最後に、ワット・パクナムの今後一層の御発展と、日本との親善交流にさらに一段のお力を賜わらんことをお願いしてお礼の言葉といたします。」

アユタヤの旧日本人町跡へ　―四月一日―

今日は最後の日程、アユタヤ行きである。

アユタヤに王朝が興ったのは一三五〇年。タイ最初の統一国家として栄えたスヨタイ王朝をしのぎ、三十三代、四一七年間続いた王朝である。

アユタヤといえば山田長政、山田長政といえばシャムと連想する人も少なくないかと思う。

今から十年程前までは、東南アジアに出かける時は予防の注射や接種が必要で、パス・ポートにはイエロー・カードを添付する必要があった。十三年前タイに出かける時、私と同年で、今はもう故人になられた詩人の高田敏子さんが、「シャムにいらっしゃるんですって？　悪い病気に罹らないよう注意してくださいね」と電話をくださったことを思い出すが、あの時も黒田方丈と一緒で、アユタヤを案内してもらい、山田長政の白木の墓標の前に佇み、歴史の流れに感じ入ったものだった。そして今から三年前、黒田方丈は次のような趣意書を日・タイ協会会長に送っている。

山田長政顕彰碑建立趣意書

日本における歴史上の人物として山田長政ほど異色の英傑は他に見出だし得ないでありましょう。

下級武士より身を起こし、雄心の赴くまま波涛万里を超えてシャム国に渡り、威武を挙げ、国都アユチヤの日本人街の邦人を糾合して内乱を鎮め、六昆王に封ぜられて毒殺の悲運にたおれた山田長政は、正に風雲に乗じ、風雲に身を隠した異才であります。

そのため、山田長政を架空の人物と見る人は過去においても少なくありませんでしたが、日本の歴史教育の現況をみるに、山田長政の名は次代を担う青少年の心から消え去るであろうことは火をみるより明らかで、寔に憂慮にたえないところであります。

山田長政逝いて三五八年、いま日タイ両国は友好親善を深めております。このときに当たり、内憂外患を払い、シャム国を危急の難局から救った山田長政の功績を顕彰することは日タイ両国にとって時宜を得たことであります。これは、かってワット・パクナムにおいて修行経験を持ち、かつ同寺に留学僧を派遣している私として特に強く感ずるところであります。

ここに私は山田長政顕彰碑の建立を発願いたしました。経費は一切負担いたしますが、右意のあるところをお汲取りくだされ、アユチアの地に建立すべく万端のご高配をお願いするものであります。

昭和六十三年十月一日

発願主

日本国横浜市港南区日野町一六〇四

善光寺住職　黒　田　大　圓

後　援　　日本パクナム会

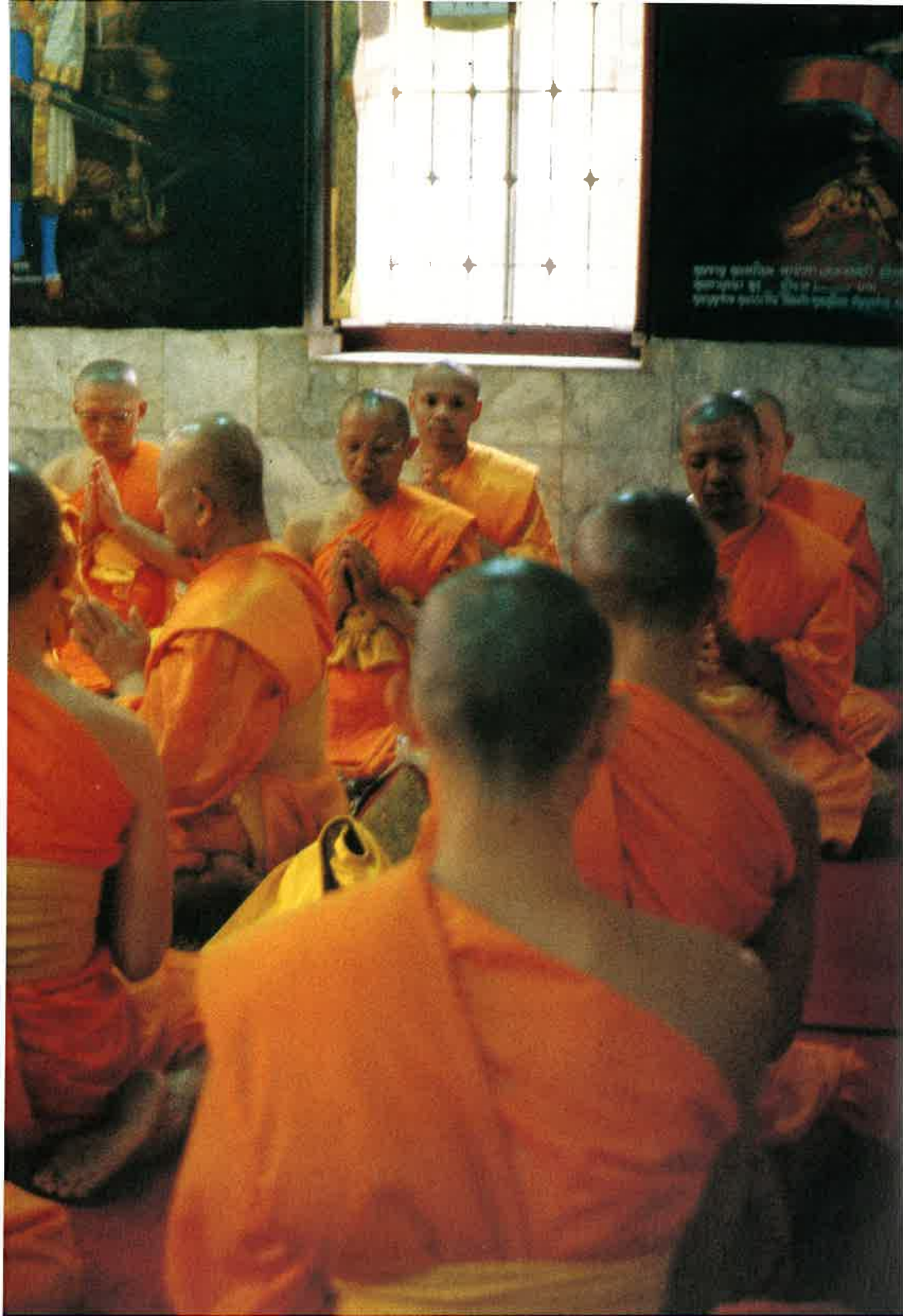
日・タイ協会会長　殿

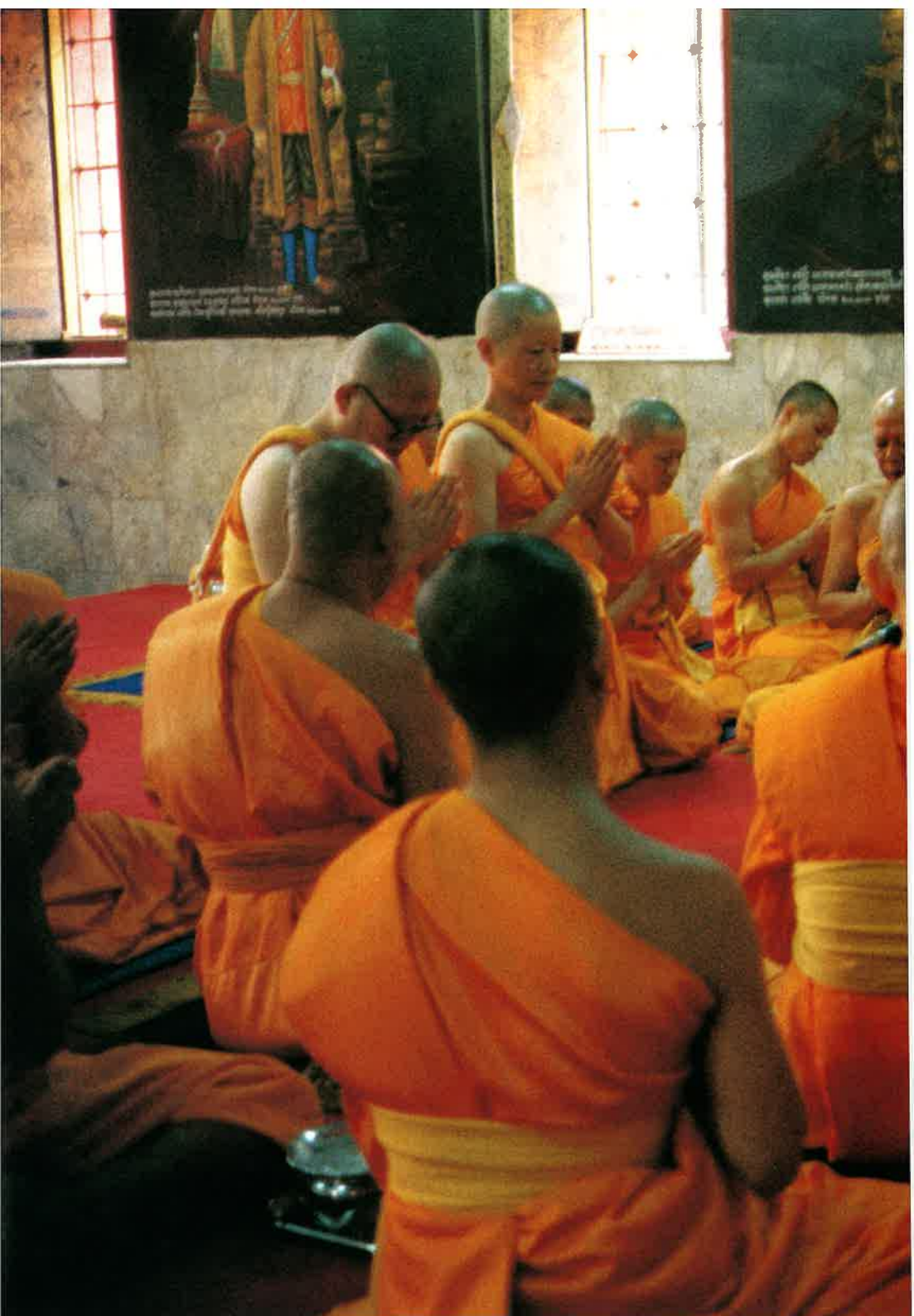
この趣意書を提出するに至った経緯はという

と、当時、日・タイ協会が旧日本人町博物館を建設する予定で、黒田方丈も協力を求められたのだったが、博物館もさることながら、供養のためお墓を造ることを忘れてはなるまいとの宗教者としての意見を述べたことに由来するものである。

ところがその後、当初の計画は大幅に修正され、日本政府から九億九千九百万円（約一億七千万バーツ）の無償援助があったので、日・タイ両政府の合意により「アユタヤ歴史研究センター」が設立されることとなり、本館はアユタヤ市ローチャナ通りに、別館は旧日本人町跡に建てられた。

足を運んでみると、一昨年十一月に行った時とはすっかり変って、実によく整備されていた。そしてまた、山田長政はこの地で亡くなった人ではないし、日本人全部の供養塔ならともかくもと建墓にはきわめて消極的だったので、今後別の形で何か協力要請があればともかくも、建墓の件はこれで打ち切り、水に流すことにしてチャオプラヤ川を舟でバンコクに下った。（終）





ประกาศ